

紀

行

会津若松、喜多方に 同志社水脈を探る

文と写真

本井 康博

(大学神学部教授)

鶴ヶ城

会津若松市

新島襄は二度、会津を訪ねている。1882年と1886年である。会津は、義兄の山本覚馬と妻、八重の生地である。

最初の訪問には、八重が同行した。戊辰戦争から、14年後である。八重は、銃を手に西軍と死闘を繰り広げた籠城時の有様を生々しく夫に語ったに相違ない。城を明け渡す前の晩、彼女は城壁に響でかをこ歌を一首掘り込んだ。

明日の夜は、何国の誰か眺むらん

馴れしお城に残す月影

一方、新島は、後年、こう記す。「孤城ヲ一周シ、又生キ残りタル人々ニモ面会シ、当時ノ有様ヲ聞キ、彼らの「勇氣ニハ大ニ感服致」し、以来、会津人に「非常ノシンパセー」を抱くに至った、と。



遠藤敬止頌徳碑

鶴ヶ城北出丸



1971年の建設。遠藤敬止は会津出身で、仙台第七十七銀行頭取。1890年、鶴ヶ城競売の際、私財を投じて購入し、旧藩主に捧げた。城を救った彼を顕彰するのがこの碑である。ただ、この「美談」も、近年は異説が出る。

遠藤は、仙台の同志社分校（宮城英学校。後に東華学校）設立のために1万円の寄付をして、新島を感激させてもいる。また、戊辰戦争中、奇しくも八重から傷の手当てをしてもらったことがある。

斉藤一・時尾の墓

会津若松市七日町・阿弥陀寺



時尾は八重と共に籠城した女性のひとり。出撃のため脇差で髪を切ろうと奮闘するも、結局、「高木盛之輔の姉、ときをさんに切ってもらいました」と、と八重は当時を回顧する。

斎藤一（維新後は藤田五郎）は、明石藩出身の新選組三番隊長。戊辰戦争に身を投じて、副長の土方歳三と会津入りをした。後に東京に出て、会津藩士、高木小十郎の娘、時尾と結婚し、会津人となった。

清水屋旅館跡

会津若松市七日町
会津を代表する老舗旅館跡。吉田松陰（1852年）、土方歳三（1868年）、

宇田成一が宿泊したことで有名。が、実は新島も、である。

宇田は、会津六郡連合会議長で、会津自由民権運動史上、著名な「清水屋事件」（福島事件）で名を知られる。三島通庸県令が推し進める「会津三万道路」開削に反対した宇田は、ここで暴漢に襲われた。1882年8月17日のことである。



無門山荘跡碑

喜多方市関柴町小松
宇田成一の生家跡である。新島は米沢から会津若松に戻る道中、同行の横井時雄を先に若松に行かせ、自分はわざわざ

「途ヲ枉テ」喜多方に足を運んだ。宇田を自宅に訪ね、詳しく「負傷ノ始末ヲ尋」ねるためであった。民権運動への思い入れば相当に深い。

それにしても、新島の行動は、素早い。事件からわずか1週間後のことなのである。ヒアリングの詳細は、喜多方で記した「遊興記事」（日記）に詳しい。同書は「喜多方物産並概況」も記述する。



添川廉斎の墓

喜多方市・安勝寺



喜多方は、新島の師、添川廉斎の出身地。添川は、安中藩主、板倉勝明に抱えられた漢学者で、江戸の安中藩邸（中屋敷）で亡くなった。入谷の正覚寺に葬られたが、喜多方にも墓がある。

ちなみに、二度目（1886年）の会津訪問の際、新島は喜多方で説教集会を開いた。土地の名士、安瀬敬蔵（二元部長）や中村虹蔵も力を貸してくれた。

添川廉斎顕彰碑

喜多方市・諏訪神社

1935年、建立。新島少年は、学問に無理解な藩主、板倉勝殷に辟易していた。勉学を続ける「唯一の希望」は、添

川と家老の尾崎直記の好意を得ることだけであった。

ところが、両人は1858年の6月、7月と、あい次いで死去した。新島は茫然自失となった。が、幸いなことに添川の後任に、川田剛が就いた。川田は、漢学の指導だけでなく、快風丸を新島に回転することになるからである。

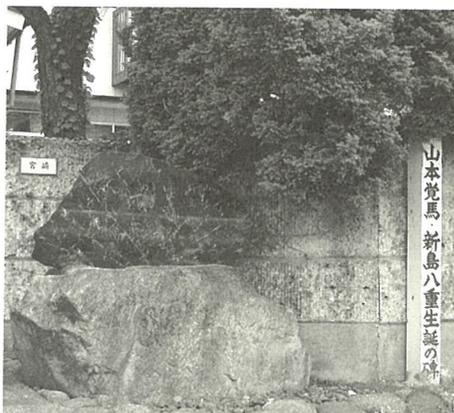


山本覚馬・八重生誕の地碑

会津若松市米代

覚馬と八重は、ここで山本権八・佐久の子として誕生。記念碑は、1989年に宮崎家前に同志社が建立した。八重の和歌、「明日の夜は」を刻む。城や藩校

に隣接するこの地で、兄妹は会津魂を豊かに育んだはずである。



日新館天文台跡

会津若松市米代

覚馬が教授を務めた藩校・日新館は、彼の生家に近い。今は天文台跡が残るばかりである。

八重の最初の夫、川崎尚之助も洋学者で、覚馬に招かれて会津入りし、山本家に寄宿した。戊辰戦争後は、出身藩（但馬出石藩）が違うため、藩内居住を許されず、八重と離婚した。



日新館

会津若松市河東町 かわひがしまち



かつての藩校を忠実に復元した施設。八重が砲術を指導した白虎隊隊員、伊東梯次郎の紹介がある。伊東家と山本家は、隣接する。八重の証言では、「梯次郎は

「小銃習いによくきた。物置からゲーベル銃を出して教えました」。

館内には、八重の出陣装束の想像図もある。弟（三郎）の形見の装束に身を固め、自ら「三郎」と名乗った。男勝りの活躍で、夜襲をも試みた。

山本権八の墓

会津若松市一ノ堰・光明寺 せき

権八（旧姓は、永倉繁之助）は覚馬・八重の父。八重の弟、三郎は鳥羽伏見の戦いで受けた怪我が死因となった。続いて父が、一の堰（鶴ヶ城南方6キロ）の戦いで戦死した。降伏の翌年、ようやく「賊軍」戦死者の埋葬許可が降りた。



山本家の墓

会津若松市・大龍寺



左端の墓は、八重が1931年に建てた権八と三郎の墓。新島の第一回会津訪問は、この権八の墓を建てるために会津入りした八重の付き添い、との推測もある。周辺の6基は、山本家の人たちの墓。ちなみに、この大龍寺は奇しくも松平容大の生誕地という。

新島八重の書

会津若松市・葵高等学校



4点が所蔵される。そのうち、1点(86歳)は、額装されて、校長室の隣の会議室に掛けられている。山本家の墓の整理のために、八重が最後に会津を訪れた1931年の時の揮毫か。

他の3点は、84歳の折の作品。県立会津高等女学校(葵の前身校)の関係者が、京都で八重に揮毫依頼したものか。

松平容保の墓

会津若松市東山町



松平家廟所。容保は、会津藩最後の藩主であり、白虎隊、新選組ゆかりの人物。八重は最期まで旧藩主への忠誠心を失わなかった。

歴代藩主が眠る廟所がある東山は、洛東・若王子山の同志社墓地を彷彿させる。八重が、東山から今も同志社を遠望しているように、旧藩主も、城下を感慨深く眺めているのだろうか。

松平容保像

会津若松市慶山・愛宕神社

「いにしえ夢街道」から百段ばかり石

段を上った本堂脇に立つ。近藤勇の墓（天寧寺）にも近い。容保は京都守護職の折、壬生浪士隊を新選組（会津藩預かり）として「公認」したばかりか、近藤の墓（全国では他に3カ所）の建設許可を土方歳三に与えた。戒名は容保の書と伝承されている。



松平容大の墓

会津若松市東山町

第九代藩主、容保の長男で斗南藩主。容大は、東京の攻玉社（現攻玉社学園）から、覚馬を頼って同志社に入學した。在学中は、会津出身の上級生、兼子常五郎が後見人となった。

が、まもなく学習院に転じた。のち、

騎兵大尉、貴族院議員、男爵。



会津若松教会

会津若松市宮町

日本キリスト教団の同志社系教会。写真は、会堂と白河出身の山下智子牧師。

歴代牧師の中では、会津出身の兼子重光（常五郎）の在任が突出する。自由民権家の彼は、「福島事件」で追われ、覚馬を頼って同志社に逃げ込んだ。在学中、壮士から伝道者に変身。後半生は30数年にわたって郷里伝道に挺身した。

なお、正規の教会成立以前、新島はこの地で12名に洗礼を授けたり、一の町の講義所（伝道所）での説教集会に長田時行と出演し、二百数十名の会衆を集めた。

